

#### 4. 「広義の中世」の突破期前半（8世紀後半～10世紀後半）

##### 4. 1 アッバース朝イスラーム帝国の衰退

コンスタンティヌス1世即位後、ローマが「金の帝国」になる。サーサーン朝ペルシャは「銀の帝国」である。ローマ金貨とペルシャ銀貨の交換がはじまり、貨幣経済が経済空間に順序構造を形成して交易が増大するが、ローマ皇帝もサーサーン朝ペルシャ王も金貨と銀貨の比価をキリスト教会とゾロアスター教会の裁定に委ねた。

だが、アッバース朝イスラーム帝国の場合、版図内に多量の金貨と銀貨が併存している。官僚機構や統治機構をサーサーン朝ペルシャ型に統合しても財貨を金貨か銀貨に一元すれば混乱が生じる。結局、ウマイヤ朝同様、アッバース朝も金貨と銀貨を鑄造して発行する。とはいえ鑄造した金貨も銀貨もカリフが最初に使用する財貨である。したがってカリフの下で金貨と銀貨の比価＝交換レートを定める必要がある。カリフの下で、アッバース朝イスラーム帝国は金銀複本位制を発明した。

（貨幣を発行する者が貨幣を最初に使用する。この「最初に使用する」権利は絶大で、支配者の力の源泉でもある。他方、「最初に使用する」権利の下で貨幣の質が均質化し、制度的側面が安定する。ふつう、制度的側面を有する貨幣を「通貨」と呼んでいるが、財貨の制度的側面は通貨より強固である。他方、物品貨幣と併存していた頃の財貨に交換差益＝為替差益は生じない。物品貨幣が貨幣の商品的側面と道具的側面を担う。言い換えれば、物品貨幣と財貨が役割を分担しながら貨幣クラスを形成する。しかし「広義の近代」の出現期にユーラシア大陸西部で物品貨幣が消滅し、財貨に為替差益が生じて金利が法制化した。それについては後述する）

当時のメソポタミアやイラン高原、ホラーサーン地方（現在のイラン東北部とアフガニスタン西北部、およびトルクメニスタン南部とパキスタン北部。アム川以西を「ホラーサーン」と呼び、アム川以东を「マールワラーアンナハル」と呼ぶ場合もある）では、おそらく商慣習として、20ミスカル（約85グラム）の純金と200ディルハム（約595グラム）の純銀の交換が成立していた。すなわち、重さを基準にした純金と純銀の交換比は1：7であった。この商慣習に従い、アッバース朝は金貨と銀貨を鑄造して発行する。だが金貨は鑄造する場面で異物が混ざる。純銀100パーセント銀貨の鑄造は可能であるが純金100パーセント金貨の鑄造は困難である。そこで、金貨と銀貨の交換レートが1：6.5になる。

妥当で十分信頼できるこの比価＝交換レートは西ヨーロッパや中央アジアにも波及し、他方、銀貨の秤量貨幣化を具現する。すなわち、銀貨と「ただの銀」が等価になる。あるいは、外見や種類と無関係に重さが銀貨の価値基準になる。金銀複本位制と銀貨の秤量貨幣化はイスラーム帝国の中心外＝周辺および版図外＝亜周辺での銀貨鑄造と銀貨発行を可能にし、帝国の分割統治を可能にした。

金銀複本位制のはじまりは770年頃である。その後アッバース朝イスラーム帝国はハールーン・ラシード（カリフ在位786～809年）の代に全盛期を迎える。他方、北アフリカとモロッコでアグラブ朝とイドリース朝が誕生し、イスラーム帝国の統治形態が分割統治に移行する。イドリース朝は独自の金貨や銀貨を鑄造して発行した（ちなみに、ウマイヤ朝＝後ウマイヤ朝がイベリア半島に残存している。後ウマイヤ朝も独自の金貨や銀貨を鑄造して発行した）。

ハールーン・ラシードの死後、アッバース朝イスラーム帝国で内乱が勃発する。内乱を征圧してカリフの座を得たマームーン（カリフ在位813～833年）は、内乱征圧に尽力したターヒルにイリ川以西およびホラーサーン地方でのムスリム新王朝＝ターヒル朝の樹立を認める。マームーンの死後、メソポタミア以西（シリアとパレスチナ、エジプト等）でもムスリム新王朝＝トゥールーン朝が誕生し、イスラーム帝国の分割統治がさらに進展する。

（マームーンがバグダードで「知恵の館」を建て、古代ギリシャの哲学や自然学、ストア哲学や新プラトン主義等を庇護したことは有名である。彼自身、ユークリッド幾何学に精通していたらしい。とはいえ、マームーンの代のアッバース朝イスラーム帝国は内乱が多発している。マームーンの死後、カリフに即位したムウタシム（カリフ在位833～842年）の代も内乱が絶えることがなかった。ムウタシムはバグダードを凌ぐ巨大都市サーマッラーを建設して遷都する。「知恵の館」の学者たちもサーマッラーに移動した。サーマッラー建設と遷都を行ったアッバース朝イスラーム帝国は財政難に陥り、その後ムタワッキル（カリ

フ在位847～861年)の代にダマスカスに一時遷都する。ムタワキルは原理主義者で、異端や異教を弾圧した。おそらく、ムタワキルの代に、「知恵の館」の学者たちがタブリーズとその周辺に移動した。ムタワキルの死後、歴代カリフがバグダードで暮らすようになるが、「知恵の館」は復興しなかった。13世紀にカリフを殺害したモンゴル軍がバグダードも破壊して「知恵の館」も破壊したと論じる歴史家がいるが、史実は異なる)

9世紀後半、ヤアクーブがサッファール朝を樹立してターヒル朝を打倒し、イリ川以西を占領する。ヤアクーブは出自が不明でイスラーム信徒＝ムスリムであったか否かも不明である。ヤアクーブはホラーサーン地方も占領し、バグダードに侵攻した。アッバース朝はヤアクーブの侵攻を阻止するが、その後サッファール朝を打倒したナスル・イブン・アフマドがホラーサーン地方およびイリ川以西でサーマーン朝を樹立して「アミール(王)」に即位する(イリ川はバルハシ湖に注ぐ川であるが、ふつう、「イリ川以西」はアラル海からバルハシ湖までの地域とアラル海に注ぐアム川とシル川に囲まれた地域、すなわち「マーワラーアンナハル」を含む。以後、イリ川からアム川までの地域を「トランスオクシアナ」地方と呼ぶ)。

サーマーン朝も独自の金貨や銀貨を鑄造して発行した。またナスル・イブン・アフマド＝ナスル1世の死後、2代目アミールに即位したイスマーイールがアッバース朝から徴税権＝イクターを獲得する。すなわち、サーマーン朝はアッバース朝イスラーム帝国から独立する。アッバース朝とサーマーン朝やトゥールーン朝、アグラブ朝やイドリース朝の関係は良好であったが、財貨発行と徴税の独占を喪失したアッバース朝は衰退する(コラム16)。

(サマルカンドとブハラが巨大都市化したのはサーマーン朝期である。現在、サマルカンドもブハラもウズベキスタン共和国の古都として栄えている。ちなみに、スルターン＝君主の称号が誕生するまで、アミールは「王」を意味した。スルターン後のイスラーム世界では「将軍」を意味する)

10世紀初頭、エジプトでトゥールーン朝が滅び、イフシード朝が誕生する。他方、北アフリカのチュニジアでファーティマ朝を樹立したウバイドゥッラーがアグラブ朝を打倒する。そして「シーア派カリフ」を称する。ファーティマ朝はイドリース朝も打倒した。そして969年、ムイッズ(ファーティマ朝第4代カリフ)の治世下で奴隷軍人ジャウハルがエジプトに進軍し、アレクサンドリアを陥落する。その後ジャウハルはイフシード朝を攻略して新都カイロを建設した。ムイッズはカイロに遷都し、他方、ジャウハルはエルサレムを陥落してパレスチナも征服する。すなわち、メソポタミア以東が独立し、シーア派のファーティマ朝がメソポタミア以西を占領して支配した。かろうじてバグダードが残り、アッバース朝も残ったが、イスラーム帝国は瓦解した。

その後ズィヤール朝やブワイフ朝がメソポタミアとイラン高原を支配し、カラハン朝やガズナ朝がトランスオクシアナ地方とホラーサーン地方を支配する。アッバース朝はバグダード周辺を支配する小国になる。11世紀中頃、セルジューク朝がイスラーム帝国を一時再現するが、ムスリム王朝＝イスラーム領邦国家の乱立は止まなかった。

ところで、東ローマ帝国＝ビザンツ帝国とサーサーン朝ペルシャの間で金貨と銀貨の交換が行われていた時代においても、金貨と銀貨の交換比は一定で、両替は等比交換であったと考えられるが、アッバース朝イスラーム帝国が金銀複本位制を発明した場面でそれが固定化した。他方、銀貨＝銀が秤量貨幣化し、世界通貨になる。そして金貨が信用取引の決済手段になる。

言い換えれば、金銀複本位制下で銀貨が交換手段になり、金貨が決済手段になる。その後秤量貨幣化した銀貨＝銀の下で商品経済が生成し、経済空間に位相構造を形成する。すなわち、経済空間が貨幣経済＝順序構造と商品経済＝位相構造の二重構造になる。そして物品貨幣が消滅し、金貨や銀貨に法的金利が生じるようになるが、筆者の認識では、この大きな変化の中心的役割を担ったのはギリシャ化した東ローマ帝国、すなわち「ビザンツ帝国」である。

(ちなみに、金銀複本位制と銀本位制、金本位制を同じものであるかのように論じる経済学者やエコノミストがいるようだが、大きな間違いである。三つの「本位制」が誕生した時代に大きなズレがあり、時代背景が大きく異なる。金銀複本位制は貨幣経済の下で誕生し、商品経済の生成を促進した。銀本位制は商品経済の下で誕生し、市場経済の生成を促進した。そして金本位制は市場経済の下で誕生し、資本主義経済の生成を促進した。現在の変動相場制は資本主義経済の下で誕生し、社会主義経済の生成を促進している、と言えるかもしれない。とはいえ、変動相場制だけが「管理通貨制」ではない。筆者は、2020年代に世界通貨制度の改変が生じる、と予想する)

## コラム 16： 世界通貨と封建制の誕生

本文で述べたように、後ウマイヤ朝とイドリース朝は独自の金貨や銀貨を鑄造して発行した。おそらく、アグラブ朝やターヒル朝、トゥールーン朝も独自の金貨や銀貨を鑄造して発行した。アッバース朝とそれらムスリム王朝の関係は概ね良好であったが、アッバース朝カリフは貨幣を「最初に使用する」権利の独占を喪失する。

サーマーン朝も独自の銀貨を鑄造して発行したが、それだけではない。サーマーン朝はアッバース朝から徴税権を獲得して事実上独立している。他王朝の財貨発行を容認し、徴税権まで譲渡したアッバース朝イスラム帝国は衰退するが、他方、銀貨の分散鑄造と分散発行が銀貨の秤量貨幣化を促進する。そして銀貨＝銀がユーラシア大陸西部の共通財になり、奴隷貿易がはじまる。

ユーラシア大陸西部でも中部でも、そして東部でも、銀貨＝銀が等価な財貨＝世界通貨になるのは10世紀後半頃である。したがって、銀貨および銀を基準にして人類史を考察すると、ディオクレティアヌスが新銀貨を発行した頃（あるいはコンスタンティヌス1世が新金貨を発行した頃）からアッバース朝が金銀複本位制を「発明」する8世紀後半頃までを「広義の中世」の出現期、銀貨＝銀が世界通貨になる10世紀後半頃までを「広義の中世」の突破期、というふうに区分できる。

とはいえ、封建制を無視できない。ユーラシア大陸東西で封建制が確立するのは10世紀後半頃で、中世帝国の封建制は12世紀後半～13世紀前半頃まで続く。したがって「広義の中世」の突破期は12世紀後半頃まで続いたと考えるほうが妥当である（ちなみに、物品貨幣も12世紀後半頃まで残る。日本では幕末まで残る）。

封建制は身分制と恩賞地制が複合した統治制度であるが、中世帝国から封建制を「輸入」した亜周辺が封建国家に変貌する。中世帝国の封建制は12世紀後半～13世紀前半頃に消滅するが、亜周辺で封建制が続く。地域差は大きい、ヨーロッパの封建制は概ね16世紀後半～17世紀前半頃まで続いた。

（ヨーロッパの封建制と日本の封建制に同時代性がある。日本では、鎌倉時代と室町時代が封建制の時代である。とはいえ江戸時代を封建制の時代に含めることはできない。筆者の認識では、江戸幕府は中央集権体制を確立して封建制から脱却した。それでも江戸時代の日本が封建的で分権的であるように見えるのは、身分制が存在し、物品貨幣＝コメが残存していたからである。筆者の認識では、コメは概ね「地域通貨」の役割を担っていた）

ところで、亜周辺が中世帝国から封建制を「輸入」したと論じる歴史家は少ない。歴史家の多くが、封建制を亜周辺のオリジナルな制度であると考えている。しかし筆者は少数派の考えを支持したい。封建制は中世帝国の産物である。その後、亜周辺が封建制を「輸入」した。

中世帝国で封建制が誕生した経緯は後述するが、「広義の中世」の突破期前半（8世紀後半～10世紀後半）は奴隷貿易が活発化して貨幣経済が肥大化し、貨幣経済の下で荘園が巨大化した時代である。そして国教会が銀行が存在しない時代の「銀行」の役割を担う。しかし銀貨＝銀が統治制度から世界制度＝世界通貨に進展した場面で「財貨の番人」が不要になる。他方、皇帝が立法権と法の執行権、弾劾裁判権等を有する「立法者」になり、国教会は立法権と司法権を有する「法の番人」の役割も喪失する。

とはいえ、亜周辺の教会や寺院に「法の番人」の役割が残る。封建制下で亜周辺の国王や諸侯は法の執行権＝行政権を有したが、いくつかの例外を除けば、「立法者」として君臨する場面がない。亜周辺では、国教会の司祭が裁判を担った。彼らは慣習法や過去の判例に従い、必要に応じて「即席立法」を行い、判決を下した。

## 4. 2 ビザンツ帝国の変貌

すでに述べたように、797年に即位した女帝エイレーネーはイコノクラスムを弾圧したが、他方、減税を実施して民意を得ようとする。そのため財政危機を克服したビザンツ帝国は再度の財政難に陥る。

802年、財務長官ニケフォロス＝ニケフォロス1世がエイレーネーを廃位して帝位を篡奪する。ビザンツ帝国の皇統がイサウリア朝からアモリア朝に変遷した（歴史家たちは、ミカエル2世が即位した820年にビザンツ帝国の皇統がイサウリア朝からアモリア朝に変遷したと論じているが、ニケフォロス1世が帝位を篡奪した802年に変遷したと考えるほうが妥当である）。

アモリア朝期のビザンツ帝国はシチリア島とクレタ島を失う。シチリア島を奪取したのはアッバース朝イスラーム帝国下のアグラブ朝で、クレタ島を奪取したのは後ウマイヤ朝の反乱分子である。またアナトリア半島の拠点都市をいくつか破壊される場面もあった。とはいえ、アモリア朝期もユーフラテス川上流以西は概ね安泰で、ビザンツ軍がアッバース朝ムスリム軍を押し返す場面さえあった。

ビザンツ帝国はアッバース朝イスラーム帝国のように版図内で王朝が乱立する場面がない。しかし貨幣経済の下で荘園が巨大化し、自由農民が減少する。イサウリア朝はイコノクラスム下で教会や修道院の荘園を皇帝直属領化し、財政危機を克服した。だが減税後の増税は容易でない。そこで、アモリア朝は小作農や奴隷からも人頭税を徴税する。ビザンツ帝国は民衆のほぼ全員が納税する帝国になり、おそらくそれが衰退に歯止めをかける。

（イサウリア朝期のビザンツ帝国の徴税は金納であった。アモリア朝も金納を継承する。小作農や奴隷からも人頭税を徴税した9世紀のビザンツ帝国で物品貨幣が消滅した可能性がある。社会学者や経済学者たちはあまり言及しないが、物品貨幣の消滅は歴史上の重大事件である。筆者の考えでは、物品貨幣の消滅が経済空間に位相構造＝商品経済が生じる必要条件である。そして商品連鎖が十分条件であるが、イサウリア朝期やアモリア朝期のビザンツ帝国は商品経済が生じる十分条件がまだ整っていない。ビザンツ帝国で富財が商品化し、それら商品が商品連鎖を形成するのはコムネノス朝期である）

867年、副帝バシレイオス1世が帝位を篡奪し、ビザンツ帝国の皇統がアモリア朝からマケドニア朝に変遷する。その頃からイスラーム帝国の衰退がはじまるが、他方、ブルガリア王国が巨大化する。

913年、ブルガリア王シメオン1世が戴冠し、ブルガリア王国が「ブルガリア帝国」になる。シメオン1世（在位893～927年）下のブルガリア帝国はビザンツ帝国との戦争を繰り返した。だが次のペタル1世（在位927～967年）は友好を維持する。約40年の平和期間に、ビザンツ帝国は法体系を刷新して国力を回復する（コラム17）。

963年、クレタ島を奪還した名将ニケフォロス・フォカスがビザンツ皇帝ニケフォロス2世に即位する。そして小アジアとキプロス島、ロードス島をイスラーム帝国から奪還する。他方、966年にスヴァトスラフ1世が北コーカサス地方のハザール・カガン国を征服し、キエフ大公国を建国する。967年、ニケフォロス2世はスヴァトスラフ1世と同盟を結び、ブルガリア帝国を挟撃した。ブルガリア帝国は崩壊するが、その後ドナウ川北岸を占領したスヴァトスラフ1世下のキエフ・ルーシ軍＝キエフ大公軍がトラキア地方まで南下し、ビザンツ帝国に侵攻する。当時のビザンツ帝国はニケフォロス2世を殺害したヨハネス・ツィミスケス＝ヨハネス1世が即位していた。ヨハネス1世下のビザンツ軍がキエフ・ルーシ軍を撃破し、スヴァトスラフ1世をドナウ川河口付近まで追いつめる。

北方の安全を確保したヨハネス1世はドイツ皇帝オットー1世と和約し、西方の安全を確保して東方に進軍する。974年、ヨハネス1世下のビザンツ軍がファーティマ朝からメソポタミア北部とアルメニアを奪還し、975年にシリアとパレスチナの一部も奪還する。もしも当時のビザンツ軍がパレスチナ全域を奪還していれば、その後の歴史は変わっていたかもしれない。だが、ヨハネス1世は976年に死去し、バシレイオス2世が即位する。他方、滅亡したブルガリア帝国の地方長官サムイルが新生ブルガリア帝国＝西ブルガリア帝国を開国し、テッサリアを占領する。986年から約四半世紀、バシレイオス2世下のビザンツ軍と西ブルガリア軍が戦い続ける。そして1014年、ビザンツ軍がクレディオン峠の戦いで西ブルガリア軍を撃破する。1018年、マケドニア朝ビザンツ帝国は西ブルガリア帝国を征服した（コラム18）。

新たな版図は新たな統治制度を必要とする。バシレイオス2世は新版図＝旧西ブルガリア帝国で税の物納を容認した。新版図では、貨幣経済が十分発達していない。すなわち、財貨の社会的蓄積が不十分である。したがって新版図での税の物納は妥当な政策であった。しかし既存版図（ギリシャや小アジア等）の自由農

民保護が不十分であった。

マケドニア朝期のビザンツ帝国は大土地所有を制限して荘園主の土地買収を抑止し、自由農民を保護した。だが、もしも自由農民に農税と人頭税の両方を課税していたとすれば、税制を改めていない限り彼らの土地売却を阻止できない。なぜなら、農税は農作物の収穫量に応じた額を納税すればよいが、人頭税は農作物の収穫量と無関係に一定の額を納税しなければならないからである。すなわち、定率税と定額税のちがいがあある。バシレイオス2世はアレングリオン制（自由農民が納税できない場合、近隣の有力者＝荘園主等が代わりに納税する制度）を制定して対処したが、1025年にバシレイオス2世が死去し、アレングリオン制がなくなる。その後大土地所有制限もなくなり、新版図の税制も既存版図の税制と同様になる。そして財政が再度悪化し、ビザンツ金貨の質＝純金含有量が低下する。

版図が拡大して国境が遠ざかれば軍管区の意義が消失し、他方、多数の文官が必要になる。ビザンツ帝国の軍管区制＝テマ制が形骸化し、官僚機構が肥大化して軍が傭兵集団化した。他方、クレタ島やキプロス島、ロードス島等のエーゲ海諸島を奪還したため、ビザンツ帝国は海軍を増強する。ビザンツ海軍が巨大化し、黒海とエーゲ海、イオニア海等の海上を支配した。海上の安全が交易を増大し、それにより造船技術と商船団を保有するヴェネツィア等イタリア都市国家が発展する。ちなみに、ビザンツ海軍が使用する軍船はヴェネツィアが建造している。ヴェネツィア海軍がビザンツ海軍を代行する場面もあった。

（当時のユーラシア大陸西部では、ビザンツ帝国が絹織物を生産し、ヴェネツィア商人やジェノヴァ商人が買い付け、西ヨーロッパやイスラーム圏で売っていた。そして秤量貨幣化した銀貨＝銀が基軸通貨になっていた。バシレイオス2世の死後、財政が悪化し、ビザンツ金貨が劣化するが、それでも版図外から流入する銀貨＝銀がビザンツ経済を支える。とはいえ銀貨＝銀に金利が生じて劣化した金貨に金利は生じない。皇帝が発行する貨幣＝金貨に道具的側面＝資本的使用価値を付与できなかったビザンツ帝国は「ビザンツ資本主義経済」を発明できなかった。他方、コムネノス朝期に「封建制」を発明する）

筆者は、皇女ゾエの「恋愛物語」に言及するつもりはない。荘園の巨大化および官僚機構の肥大化と軍の巨大化等により、ビザンツ帝国の財政は再度悪化した。1057年に即位したイサキオス1世は軍管区制を強化して官僚機構を縮小し、財政再建を試みる。だが貴族や官僚たちが改革に反発する。イサキオス1世は元老院議員のコンスタンティノス・ドゥーカス＝コンスタンティノス10世に帝位を譲渡し、ビザンツ帝国の皇統がマケドニア朝からドゥーカス朝に変遷する。

その頃、トランスオクシアナ地方で誕生したセルジューク朝がホラーサーン地方とイラン高原、メソポタミア全土を支配し、トルコ系族長アルプ・アルスラーンがアッバース朝カリフから「スルターン」の称号を得てシリアやパレスチナ、アラビア半島の紅海沿岸でファーティマ朝と対峙していた。当初、セルジューク朝ムスリム軍はビザンツ軍との戦闘を回避していたが、1071年にビザンツ皇帝ロmanos4世率いるビザンツ軍が攻撃を仕かける（マラズギルトの戦い）。しかしビザンツ軍は敗北し、セルジューク朝ムスリム軍はロmanos4世を捕縛する。アルプ・アルスラーンはロmanos4世を釈放したが、帰国したロmanos4世は帝位を失い、1072年に死去する。

同年、ノルマン人が地中海に侵入し、ビザンツ帝国はイタリア半島南端のカラブリアやプッリャ、そしてギリシャの一部を失う。他方、セルジューク朝ムスリム軍はさらに進軍し、シリア北部と小アジアの大半を占領する。アルプ・アルスラーンは、占領したシリア北部や小アジア各地を同族に分け与えた。1077年、小アジアでルーム・セルジューク朝が誕生する。

（以後、本家セルジューク朝を「大セルジューク朝」と呼ぶが、セルジューク朝はシーア派であつたらしい。おそらく、スルターン＝君主は当時のアッバース朝カリフがシーア派のために用意した称号である。後にスンナ派ムスリム王朝のアミール＝王もスルターン＝君主を称するようになるが、ルーム・セルジューク朝は他のムスリム王朝としばしば戦う）

ビザンツ帝国は縮小した版図で新たな形態の統治をはじめ。1081年、アレクシオス・コムネノス＝アレクシオス1世（在位1081～1118年）がドゥーカス朝から帝位を篡奪してコムネノス朝を樹立した。彼は地方に徴税権を割譲し、プロノイア制＝恩貸地制を実施する。他方、ヴェネツィアと同盟を結び、ギリシャの一部（アルバニアやコルフ島等）をノルマン人から奪還した。その後ローマ教皇ウルバヌス2世に傭兵の提供を要請し、小アジアの奪還を目指す。だが、ウルバヌス2世はクレルモン教会会議で聖地エルサレムの奪還を呼びかける。1096年、第1回十字軍遠征がはじまる。

ところで、「プロノイア」は爵位を意味するギリシャ語であるが、官位であつたとの説がある。ビザンツ帝国はマケドニア朝末期から官位を売却していた。したがって官僚機構が肥大化した。他方、官位は年金

受給資格でもある。すなわち、将来の年金受給を見込んで官位を購入する人々が大勢いた。

ドゥーカス朝期のビザンツ帝国は年金の支払いに苦慮していた。アレクシオス1世は、年金を支払う代わりに公有地を分配したのかもしれない。それら公有地は皇帝や国教会が保有する土地であったが、公有地＝恩貸地の分配は小作農を荘園から引き離す。コムネノス朝期のビザンツ帝国で荘園が労働力を失い衰退した。同じことが同時代の中国（北宋および南宋）や西ヨーロッパ諸国で生じている。北宋と南宋については後述するが、コムネノス朝ビザンツ帝国は南宋と似ている。

荘園が衰退した後、村落共同体＝農村が誕生する。中世帝国の封建制（身分制および恩貸地制）は13世紀に消滅するが、中世帝国から封建制を輸入した亜周辺＝西ヨーロッパ諸国等で長く残る。

財政難を解決する苦肉の策であったが、劣化した金貨を大量発行するより公有地を売却するほうがましである。プロノイア制を実施したアレクシオス1世は名君であった。次のヨハネス2世も名君であった。ビザンツ帝国は南宋と同様な「高度中世帝国」に進化し、コムネノス朝は約100年（1081～1185年）続く（コラム19）。

### コラム17： 新たな異端と新たな統治体制

スラヴ世界でキリスト教を布教するために、キュリロスとメトディオスの兄弟がスラヴ文字＝グラゴル文字を考案して聖書を訳したことは有名である。彼らの弟子たちがブルガリアに移り、ギリシャ文字に近いキリル文字を考案して聖書を「スラヴ語」に訳した。キリスト教の布教により、ブルガリアおよびスラヴ世界の識字率が高まる。

他方、ブルガリアで異端（パウロ派やボゴミール派）が誕生する。信仰に疎い筆者にギリシャ正教会やカトリック教会とそれら異端のちがいは説明できないが、しばらくして西ヨーロッパでも異端（ワルドー派やカタリ派）が誕生する。それら異端がボゴミール派等の影響下で誕生したことはあきらかである。

とはいえ、重視すべきことが他にある。カトリック教会では、教皇＝ローマ教皇と皇帝＝ドイツ皇帝の関係は概ね対等であるが、ギリシャ正教会では総主教（カトリック教会の教皇に相当する）もビザンツ皇帝の臣下である。そのような体制下でなければ、すなわち皇帝＝立法者体制の下でなければ国教会が保有する土地を売却するといった斬新な政策を実施できない。ビザンツ帝国で身分制と恩貸地制（すなわち封建制）が誕生し、異端だけでなく封建制も西ヨーロッパに伝わった。しかし西ヨーロッパで統治者が立法権と行政権を有する「立法者」として君臨する体制がはじまるのはかなり後になる。

西ヨーロッパの封建制は西ヨーロッパのオリジナルな制度ではない。同じことがユーラシア大陸東部、すなわちアジアでも言える。日本の封建制は日本のオリジナルな制度ではない。日本は中国＝南宋から封建制を輸入した。あるいは韓国＝高麗から間接輸入した。

### コラム18： マケドニア朝ビザンツ帝国

むろん民衆のほぼ全員が納税していたことが大きい。ニケフォロス2世とヨハネス1世、バシレイオス2世下のマケドニア朝ビザンツ軍が強かったのは軍の主力部隊が重装騎兵隊であったためであると言われている。ビザンツ帝国は、おそらくカロリング朝フランク王国の重装騎士団を模倣して重装騎兵隊を編成した。とはいえ規模がはるかに大きい。ビザンツ帝国は、中央アジア等から大型馬を選別輸入して飼育し、時間をかけて増やしたように思う。当時のヨーロッパ諸国やムスリム諸王朝はそれに対抗する軍事力を持っていない。ちなみに、「ギリシャの火」がどのような兵器であったかは不明であるが、当時のビザンツ帝国が強力な火力を持っていたことも確かである。

バシレイオス2世はビザンツ帝国の版図を最大化した。彼の生活は禁欲的で、国庫も潤った。したがって名君であったと言われている。しかし西ブルガリア帝国を約四半世紀攻撃して支配する必要はなかった。版図の拡大を目指すのであれば、パレスチナに侵攻すべきであった。バシレイオス2世がエルサレムを奪還していれば、十字軍遠征などという馬鹿げた事態は起きなかったのである。

歴史家たちは、ニケフォロス2世とヨハネス1世、バシレイオス2世の代のマケドニア朝ビザンツ帝国が当時の世界最強国家であったことを重視する。しかし筆者は、彼らの前に在位したレオン6世とコンスタンティノス7世に注目したい。レオン6世はバシリカ法典＝国法を編纂した。そして皇帝が「国法」を執行し、行政官や裁判官を弾劾する。すなわち、ビザンツ帝国は「法治国家（初期法治国家）」になり、国教会＝ギリシャ正教会が「法の番人」の地位を喪失する。

バシリカ法の制定にブルガリア皇帝シメオン1世が怒り、ブルガリア帝国と戦争を繰り返す場面もあった。しかしビザンツ帝国は新体制を維持し、国法＝バシリカ法を残す。そしてヘレニズム文化が蘇生する。コンスタンティノス7世下のビザンツ帝国でヘレニズム期のギリシャ哲学が「異教」から脱却した。またイスラーム世界に残存する古代ギリシャ哲学や自然学を受け入れる環境も整う。

バシリカ法以前のビザンツ帝国は慣習法の集大成、すなわちユスティニアヌス法を採用していた。しかしバシリカ法はユスティニアヌス法を卑俗法化して金利を法制化し、返済の滞り等を違法化する「国法」である。したがって、シメオン1世下のブルガリア帝国とビザンツ帝国の戦争は慣習法派と国法派の抗争で、借り手と貸し手の抗争でもある。ビザンツ国内にもシメオン1世を支持する勢力が多数存在した。

青年期のシメオン1世は司教になるつもりでいた。兄が死去したため、やむなくブルガリア王に即位する。その後戴冠して「ブルガリア皇帝」に即位するが、当時のブルガリアはユスティニアヌス法を共有していた。シメオン1世の信仰心は強く、ユスティニアヌス法を護持する彼の決意も固い。それはブルガリアの民衆を守るためでもあった（ブルガリアの民衆は大多数が農民で、借り手ある。慣習法＝ユスティニアヌス法の下であれば、国教会＝ギリシャ正教会は法を恣意的に運用し、借金に苦しむ農民に配慮しながら妥当な裁きを下すことができた。国法＝バシリカ法の下で「裁量判決」ができなくなる）。

同時代のユーラシア大陸東部でも、北宋で新法派と旧法派の対立が生じた。しかし法学者たちは、国法の制定と慣習法の否定を近代以降の出来事であるかのように論じている。だがその起源をマケドニア朝ビザンツ帝国と北宋に求めることができる（「広義の近代」の突破期に、イングランドで同様な場面が生じたが、トマス・ホブズは中世から存在する法＝慣習法に言及しなかった。ホブズが著書「リヴァイアサン」で論じた「自然法」は慣習法ではない）。

余談であるが、人類史上初の成文憲法を制定したのはアメリカ合衆国である。そして現在のアメリカ合衆国はバシレイオス2世治世下のビザンツ帝国とよく似ている。また現在の世界状況と当時の世界状況がよく似ている。すなわち、どちらも一極支配体制の世界を構築し、それが徐々に崩れる世界である。

本書は、「経済」を基準にして世界史空間を構成した。そのため1975～2025年の世界と975～1025年の世界を比較できない。しかし政治と軍事を基準にして世界史空間を構成すれば、1975～2025年の世界は975～1025年の世界を反復している、と言えるかもしれない。

他方、ビザンツ帝国が「ビザンツ資本主義経済」を発明できなかったように、アメリカ合衆国がドル貨幣の道具的側面を資本的使用価値から社会的使用価値等に置き換え「アメリカ社会主義経済」を発明する場面はおそらくない。アメリカ合衆国の金融資本は、政府を支配するくらいに強くなったが、それでもアメリカ国民の過半数以上が金融資本を非難しつつ社会主義経済より資本主義経済の未来を信じているように思う。

## コラム19： 封建国家の定義

封建国家は、国王や領主が領内の土地や領民を私物化し、自身の裁量で運営および使役する「家産国家」である、と言われている。したがって、たとえばクロヴィス1世やカール1世が死去した後のフランク王国が分裂したのは、国王が国家を私物化していたためである、と論じる歴史家や社会学者がいる。だが、コラム12で述べたように、フランク王国が封建国家であれば部族の勝手な侵略や略奪を許さないはずである。

封建国家の対外交渉は統治者の私的商いで、封建国家の対外戦争は統治者の私闘であったとは考えにくい。メロヴィング朝フランク王国やカロリング朝フランク王国は封建国家ではない。本書では、銀貨＝銀が秤量貨幣化して世界通貨＝世界制度になった後、封建制（身分制と恩貸地制）が新たな統治制度になり、民衆の住居と職業が固定化した王国や地域を封建国家と呼ぶ。元朝が支配する前の韓国＝高麗、鎌倉時代の日本は初期封建国家である。

#### 4. 3 ビザンツ帝国の垂周辺

コラム12で述べたが、クロヴィス1世の死後、彼の孫の代にフランク王国が分裂した。しかし7世紀後半、宮宰エブロインがフランク王テウデリク3世（在位679～691年）を支え統一を再現する。テウデリク3世の死後、幼少の王の即位が続くが、その間、宮宰ピピン2世が執政を担い統一を維持した。ピピン2世の死後、ピピン2世の嫡子カール・マルテルが幼少の王を支え統一を維持する。

732年、ウマイヤ朝アラブ軍がピレネー山脈を越えてフランク王国に侵入したがカール・マルテル率いるフランク軍が撃退する（トゥール・ポワティエの戦い）。その後アラブ軍の騎馬兵団に苦戦したカール・マルテルはキリスト教会が保有する土地の一部を還俗して臣下に分配し、重装騎士団を編成した。

737年、フランク王テウデリク4世が嫡子を残すことなく死去し、フランク王位が空位になる。そして741年、カール・マルテルが死去する。743年、カール・マルテルの長男カールマンの支持を得てキルデリク3世がフランク王に即位したが、その後カールマンはモンテ・カッシーノ修道院に突如隠遁する。そして751年、カール・マルテルの次男ピピンがキルデリク3世を幽閉してフランク王ピピン3世に即位した。

ローマ司教区はピピン3世の即位を承認する。即位後、ピピン3世はランゴバルド王国に侵攻し、西ローマ帝国の古都ラヴェンナとその周辺を奪還してローマ司教区に寄進した（ピピン3世はフランク王位を篡奪したが、東ローマ皇帝＝ビザンツ皇帝への臣従を拒否したローマ司教区＝ローマ教会は彼の即位を承認する。ピピン3世の寄進はその返礼であるが、この「寄進」からローマ教皇庁の「歴史」がはじまる。以後、ローマ教会総主教を「ローマ教皇」と呼ぶ）。

ピピン3世の死後、彼の長男カールがフランク王カール1世に即位し、名実共にフランク王国の王統がメロヴィング朝からカロリング朝に変遷する。ピピン3世は父の政策を継承して臣下の財力を高め、重装騎士団を強化していた。祖父と父から重装騎士団を相続したカール1世は即位直後から外征をはじめた。

773年、カール1世はローマ教皇ハドリアヌス1世の要請を得てランゴバルド王国に侵攻する。そして774年、ランゴバルド王国の首都パヴィアを占領してイタリア半島北部を征服し、中世イタリア王国を建国する。その後ライン川を超えてサクソン人の領地＝ザクセン地方（ライン川東岸からエルベ川西岸までの地域）に侵攻し、他方、ピレネー山脈を越えて後ウマイヤ朝の征服を試みた。

サラゴサ総督スライマーンを殺害したアル・フセインが後ウマイヤ朝に忠誠を誓い徹底抗戦したため、フランク軍はイベリア半島から撤退したが、ライン川以東のザクセン地方を概ね占領し、さらにドナウ川以南のバイエルン地方を威圧して支配する。その後カール1世は外征先をアヴァール人が住むドナウ川以北のパンノニア地方に向ける。796年、フランク軍はアヴァール人の居住地域を破壊しつつ、莫大な富財を略奪した（アヴァール人の抵抗は微弱であった。西突厥の脅威から解放されたアヴァール人＝柔然は、約200年の平和期に軍事力を喪失していたのかもしれない）。

800年、中世イタリア王国を建国したカール1世はローマで戴冠する。当時のビザンツ皇帝は女帝イレネーである。だがローマ教会（以後、「カトリック教会」と呼ぶ）は「女性のローマ皇帝」を認めていない。したがってカール1世の戴冠は彼の「西ローマ皇帝」即位を意味するが、802年にニケフォロス1世がビザンツ帝国の帝位を篡奪し、カール1世の西ローマ皇帝即位を拒否する。激怒したカール1世下のフランク軍がヴェネツィアに進軍したが、陸上で無敵であったフランク軍は海上で無力であった。

811年、ブルガリア王国との戦争（プリスカの戦い）でニケフォロス1世が戦死し、新たに即位したビザンツ皇帝ミカエル1世との間で和議が成立する。しかし、ミカエル1世はカール1世の「フランク皇帝」即位を認めず、西ローマ皇帝即位までは認めない。フランク王国とビザンツ帝国の大戦は不可避であるように見えた。だが、その頃からヴァイキング時代がはじまる。そして814年、カール1世が死去し、後を継いだルートヴィヒ（フランス名ルイ）が在位中にフランク王国を分割する。「帝位」はライン川以東の東フランク王国（後のドイツ）が継承した（本書では、その後のカロリング朝に言及しない）。

ところで、古代社会では、物品貨幣（家畜や穀物、木材）が「富」で土地や奴隷が「財」である。征服者は被征服者を自領内や占領地で使役したが、他者に「売る」場面は稀であった。貨幣経済が誕生した中世社会で富と財が結合して「富財」になり、金銀複本位制下で銀貨が秤量貨幣化した後、征服者たちは被征服者を売るようになる。征服者たちは被征服者＝奴隷をユーラシア大陸西部の基軸通貨＝銀と交換した。9世紀初頭のユーラシア大陸西部では、奴隷の獲得も戦争目的のひとつになる。

当時、奴隷をもっとも多く「輸出」したのはフランク王国である。カール1世下のフランク軍がオーデル



川を越えバルト海沿岸に進軍する場面はなかったが、エルベ川を超える場面があった。当時、ユトランド半島やスカンジナビア半島で暮すノルマン人たちはキリスト教に改宗していない。フランク軍は彼らを捕縛して「輸出」した。奴隷の大口買い手はアッパース朝イスラーム帝国である。バグダード建設後、さらなる巨大都市サーマッラーの建設、イラン高原やホラーサーン地方の灌漑等に着手していたアッパース朝イスラーム帝国は土木事業で使役する奴隷を無際限に必要としていた。

アイダー川以北のユトランド半島で暮すノルマン人＝デン人（デンマーク人）にとって、奴隷の輸出で基軸通貨＝銀を稼ぐフランク王国の拡大は脅威である。他方、アッパース朝イスラーム帝国にとって奴隷の売り手がフランク王国でなければならない理由はない。また奴隷が非キリスト教徒でなければならない理由もない。異教徒がキリスト教徒を捕縛して売ることもできる。810年、デンマーク王ゴズフレズが200隻の軍船で北海沿岸のフリースラント（現在のドイツとオランダの国境付近）を襲撃する。しかしフランク王国に海軍はない。カール1世下のフランク軍がノルマン人に反撃する場面はなかった。

9世紀前半から11世紀中頃まで、中世ヨーロッパのヴァイキング時代が続いたが、810年にデンマーク王ゴズフレズがフリースラントを襲撃し、960年にデンマーク王ハーラル1世がキリスト教に改宗するまでの約150年は「奴隷にするか奴隷にされるか」の時代である。部族集団が乱立していた当時のアイルランドやイングランドがノルマン人の餌食になるのは必然であった。ノルマン人たちは東フランク王国を襲撃し、北海を迂回してアイルランドを支配する。その後イングランドに侵攻する。そしてウェセックスを除くイングランドのほぼ全域を支配し、西フランク王国（後のフランス）にも侵攻する。ノルマン人たちは西フランク王国各地に拠点をつくりパリを襲撃した。さらに南下してサンスも襲撃する。そして912年、ノルマン人の族長ロロが西フランク王国北西部（北フランス西部）にノルマンディー公国を建国した。

ノルマン人たちが東西フランク王国やアイルランド、イングランド等を荒らしていた頃、アヴァール人に代わりスラヴ人がボヘミア（現在のチェコ）とスロバキア、カルパティア山脈以西のパンノニア地方に移住し、モラヴィア王国を建国する。だが東方のマジャール人（ハンガリー人）がパンノニア地方に移動してモラヴィア王国を滅ぼす。そしてロロがノルマンディー公国を建国した頃、西方に侵入しはじめる。

その頃、東フランク王国はカロリング朝が断絶し、ザクセン公ハインリヒ1世が統治していた。ハインリヒ1世の死後、彼の次男オットー1世（在位936～973年）が反乱を平定して「皇帝」に即位し、その後約180年続いた中世イタリア王国を征服する。そして955年、レヒフェルトの戦いでマジャール人を撃退し、ローマで戴冠した（以後、歴代ドイツ皇帝がイタリア半島北部を支配するようになるが、実際に中世イタリア王国を征服したのはオットー1世の嫡子リウドルフである。リウドルフは957年に死去する。その後オットー1世がイタリア半島北部の支配を優先したため、マジャール人はパンノニア地方に残り、ハンガリー王国を建国する）。

ビザンツ帝国はカール1世の西ローマ皇帝即位を認めなかったが、それから約170年の歳月が経過している。しかもスヴァトスラフ1世の侵攻を阻止したビザンツ皇帝ヨハネス1世はファーティマ朝を攻略してシリアやパレスチナの奪還を目指していた。ヨハネス1世はオットー1世の西ローマ皇帝即位を認めなかったが、オットー1世の息子オットー2世の西ローマ皇帝即位を保証する。972年、ビザンツ帝国の皇女テオファヌがオットー2世に嫁いだ。

テオファヌとオットー2世の母アーデルハイトとの関係は芳しくなかったが、彼女から「ビザンツの知」を得たオットー2世は善政を尽くす。だが973年にオットー1世が死去し、983年にオットー2世が死去する。その後オットー2世とテオファヌの間に生まれたオットー3世が即位するが、991年にテオファヌが死去し、1002年にオットー3世が死去する。そして1024年、ザクセン朝が断絶する。他方、西フランク王国は987年に王統がカロリング朝からカペー朝に変遷している。以後、東フランク王国を「ドイツ」、西フランク王国を「フランス」と呼ぶ（コラム20）。

ザクセン朝断絶後、ザーリアー朝がドイツの帝位を継承する。すでに述べたように、西フランク王国＝フランスではセナトール貴族が世俗司祭になり、荘園を経営していた。彼らはフランスの支配者層でもあった。すなわち、フランスではカトリック教会が統治機構の役割を担っていた。ドイツも同様になる。歴史家たちは「帝国教会政策」と呼んでいるが、初代ザーリアー朝ドイツ皇帝コンラート2世（在位1024～1039年）はカトリック教会の統治機構化を推進した。他方、経緯は割愛するが、カロリング朝期に再生したブルグンド王国＝アルル王国を併合する。そして各地の有力者に「伯位」を与える。

（ドイツ帝国の支配下で、広大なブルグンド王国がプロヴァンスやブルゴーニュ、サヴォイア等に分裂した。その後プロヴァンスやブルゴーニュはフランス王国の一部になるが、サヴォイアはドイツ帝国の一部であり続けた。そして1416年、サヴォイア＝サヴォイア伯国は「サヴォイア公国」に昇格し、1720年に開国した「サルデーニャ王国」の母体になる。ちなみに、サルデーニャ王国の首都は現在のイタリア・ピエモ

ンテ州トリノ市である。また、現在のスイス連邦共和国はブルグンド王国の一部である。メロヴィング朝期もカロリング朝期もフランク王国の同盟国であったブルグンド王国は、フランク王国が分裂した場面で分裂する運命にあったと言えるかもしれない。ブルグンド王国の歴史は興味深い、本書では言及しない)

コンラート2世の死後、彼の嫡男ハインリヒがドイツ皇帝ハインリヒ3世に即位する。ハインリヒ3世はイタリア遠征を繰り返して皇帝権を強化したが、39歳で死去する。ハインリヒ3世の死後、彼の嫡男ハインリヒが6歳でドイツ皇帝ハインリヒ4世(在位1056~1105年)が即位する。カトリック教会が司教たちによる選挙=コンクラーヴェでローマ教皇を選出するようになるのはこの頃からであるが、幼帝の即位が教皇権を強化した。

だが、成人したハインリヒ4世は皇帝権=教皇叙任権の回復を試みる。1080年、「カノッサの屈辱」に耐えたハインリヒ4世は教皇グレゴリウス7世の廃位を宣言し、対立教皇クレメンス3世を擁立してローマに進軍した。グレゴリウス7世は籠城して抵抗し、シチリア王国に援軍を要請する(シチリア王国については後述する)。ハインリヒ4世下のドイツ軍は撤退したが、その後シチリア軍がローマを略奪する。グレゴリウス7世はローマを離れ、1085年に死去する。

ハインリヒ4世の死後、ドイツ皇帝に即位した彼の末子ハインリヒ5世がヴォルムス協約(1122年)を結び、ドイツ皇帝とローマ教皇の闘争=叙任権闘争は一応の決着を得る。そして1125年、ハインリヒ5世が死去する。その後しばらくして、ドイツ帝国の皇統がザーリアー朝からホーエンシュタウフェン朝に変遷した。

ところで、アッパース朝が北アフリカとエジプト、パレスチナ等を喪失したのは10世紀中頃である。10世紀後半のアッパース朝が奴隷の大口買い手であったとは考えにくい。アッパース朝から北アフリカやエジプトを奪取したファーティマ朝も、奴隷を必要としたかもしれないが、おそらく軍がマムルーク=奴隷兵士にして使う屈強な若い男性だけである。10世紀後半、あるいは11世紀初頭、奴隷の財産価値が低下して中世ヨーロッパの「奴隷にするか奴隷にされるか」の時代が終わる(コラム21)。

1028年、イングランドを征服したノルマン人たちの王クヌーズ1世がイングランド王とデンマーク王、ノルウェー王を兼ね北海帝国を建国した。だがクヌーズ1世の死後、北海帝国は内紛で消滅する。その後サクソン人のエドワードがイングランド王に即位する。イングランドの王統がノルマン系のデーン朝からアングロ・サクソン系のウェセックス朝に変遷したが、その頃、フランスでもカロリング朝が断絶してカペー朝が誕生している。そしてカペー朝フランス王アンリ1世からノルマンディー公の地位を得たウィリアム1世がイングランドに上陸し、ヘイスティングズの戦いでイングランド王ハロルド2世を倒す。ウィリアム1世はノルマン朝イングランド王国を建国した(正確には、ノルマンディー公ウィリアム1世がイングランドをフランス王国の支配地にした、と言わなければならない。すなわち、ウィリアム1世が建国したイングランド王国はフランス王国の属国である。ウィリアム1世は人生の大半をフランスで過ごし、フランス王アンリ1世に臣従した)。

他方、1047年にノルマンディー公国を出立したノルマン人ロベール・ギスカール(イタリア名ロベルト・グイスカルド)がランゴバルド族が支配していたイタリア半島南部とビザンツ帝国が支配していたイタリア半島南端、イスラーム教徒が支配していたシチリア島を征服する。そして1081年、ビザンツ皇帝アレクシオス1世率いるビザンツ軍を破り、アルバニア=ダルマツィア地方とコルフ島(ケルキラ島)を占領した。ギスカールは、イタリア半島南部を自身の領地とし、シチリア島を弟ルッジェーロ1世に与え、アルバニアやコルフ島を長男ボエモン1世に与える。ギスカールの死後、彼の弟ルッジェーロ1世がイタリア半島南部とシチリア島を統治し、ルッジェーロ1世の子息ルッジェーロ2世が「シチリア王国」を開国してシチリア王に即位する(歴史家たちは、1066年のヘイスティングズの戦い、あるいはロベール・ギスカールがイタリア半島南部やシチリア島を征服した場面で中世ヨーロッパのヴァイキング時代が終わったと認識している)。

ビザンツ帝国はヴェネツィア海軍の協力を得てアルバニアとコルフ島をボエモン1世から奪還するが、このとき、ビザンツ皇帝アレクシオス1世はヴェネツィアに関税特権等を与えている。他方、アレクシオス1世はルーム・セルジューク朝から小アジアの奪還を目指す。アレクシオス1世はローマ教皇ウルバヌス2世に傭兵の提供を要請するが、ウルバヌス2世はエルサレム奪還を呼びかけ、それが第1回十字軍遠征のはじまりになったことはすでに述べた。

## コラム20：ランスの魔術師

歴史家の佐藤彰一氏は、著書「西ヨーロッパ世界の形成（中公文庫）」で「広義の中世」に活躍した文人を三名上げている。佐藤氏が上げる三名の文人は、メロヴィング朝に仕えた詩人フォルトゥナトゥス、カール1世の師でもあったトゥール司教アルクイン、「ランスの魔術師」と呼ばれたジェルベールである。

ジェルベールはフランスのオーヴェルニュで生まれた。牧人の子であつたらしい。幼少の頃に修道院に入り、成人して修道士になる。そしてカタルーニャに遊学する。当時のイベリア半島は後ウマイヤ朝の絶頂期で、ジェルベールはイスラーム世界の代数と幾何、天文学、音響学を学んだようである。その後オットー2世の師になり、しばらくしてランスに移り聖堂学校や修道院学校の教壇に立つ。そして数学や天文学を教えた。当時のヨーロッパの人々にとって、イスラーム世界の高度な数学や天文学は驚異であつた。

983年、オットー2世が死去し、オットー3世が3歳で即位する。オットー3世が成人するまでの間、オットー2世の妃テオファヌがドイツ帝国の執政を担うが、バイエルン公ハインリヒ2世のような大貴族が帝位を篡奪しようとする。このとき、ジェルベールは、テオファヌに仕える女官に、「私の名において、テオファヌ皇太后陛下にお伝えください。フランス国王は、陛下の御子息を支持し、ハインリヒを打倒することしか考えておりません」という手紙を送っている。そして当時のランス大司教の協力を得てカペー朝を樹立する（テオファヌの死後、オットー3世が親政をはじめめる995年まで、オットー3世の祖母アーデルハイトがドイツ帝国の執政を担う。ちなみに、初代カペー朝フランス王ユーグ・カペーの母親はオットー1世の妹である）。

当時、マケドニア朝ビザンツ皇帝バシレイオス2世は圧倒的な軍事力で版図を拡大していた。しかもキエフ大公国と同盟を結んでいる。ジェルベールは、マケドニア朝ビザンツ帝国に対抗するには、ドイツを中心にして西ヨーロッパ全域を帝国化する必要があると考えていたように思う。それは故オットー2世の意思であつたし、テオファヌの意思でもあつた（テオファヌはビザンツ帝国の皇女で、彼女が西ヨーロッパに「生活文化」をもたらしたと言っても過言ではない。とはいえ、彼女はバシレイオス2世の縁者ではない。しかもカトリックに改宗している。彼女は当時の世界最強権力者に立ち向かっていた）。

991年、ジェルベールはランス大司教に就任する。そして999年、ローマ教皇に就任した。就任後、ジェルベール＝ローマ教皇シルヴェステル2世は新たな考えを抱く。西ヨーロッパと東ヨーロッパの合併である。彼はオットー3世とビザンツ皇女ゾエの結婚を工作する。だが1002年にオットー3世が死去し、翌年、ジェルベール＝ローマ教皇シルヴェステル2世も死去する。

ジェルベール＝ローマ教皇シルヴェステル2世は西ローマ帝国を再現し、さらにローマ帝国そのものを再現しようとしていた、と論じる歴史家もいる。だが、彼はリアリストである。彼は中世帝国から脱皮した新しい帝国、すなわち「世界帝国」の建設を考えていたように思う。

（他方、リアリストであつたことが、他のカトリック聖職者たちに「悪魔と契約したランスの魔術師」と言わせることになる。ちなみに、オットー3世はビザンツ皇帝のような「立法者」として君臨することを望んでいた。したがってカトリック聖職者たちが言う「悪魔」とは、おそらくオットー3世である）

やがてテムジン＝チンギス・カンがモンゴル帝国を建国するが、モンゴル帝国はジェルベールがイメージした世界帝国に近い。とはいえ、世界帝国の基準は版図の広さではない。世界帝国は三権集中分権システムである。ジェルベール＝シルヴェステル2世ほどヨーロッパ各地を移動したローマ教皇はおそらくいない。彼は移動の過程で世界帝国の構想を得たと思う。世界帝国では、国教は最高法規の地位を喪失する。そして皇帝が立法権と法の執行権＝行政権、司法権を有する「立法者」として君臨し、諸王や諸侯が「国法」の下で領地を経営する。

## コラム 2 1 : 東ヨーロッパの二分化

ヴァイキング時代の主要な黒海貿易は奴隷貿易で、クリミア半島湾岸は奴隷の集積地であった。ノルマン人たちは、アイルランドやイングランド、フランク王国だけでなく現在のロシアやウクライナ、ベラルーシに侵入して在住のスラヴ人を捕縛し、ヴェネツィア商人やジェノヴァ商人に売り渡していた。キエフ大公国を建国したスヴャトスラフ 1 世もハザール人とノルマン人＝ヴァリャーグの血を継いでいる。彼の母オリガはキリスト教＝ギリシャ正教に改宗したが、スヴャトスラフ 1 世は改宗していない。スヴャトスラフ 1 世の三男ウラジーミル 1 世も、即位後、ノルマン人の伝統的な北欧信仰＝オーディン信仰の下でキエフ大公国を統治する。

だが 988 年、ウラジーミル 1 世はキリスト教＝ギリシャ正教に改宗し、バシレイオス 2 世の妹アンナと結婚する。それによりバシレイオス 2 世はウラジーミル 1 世から援軍を得て内乱を鎮圧したが、ウラジーミル 1 世が得たものも大きかった。ウラジーミル 1 世の改宗はすでにキリスト教＝ギリシャ正教に改宗していたスラヴ人たちとの共存を可能にし、他方、アンナと結婚はビザンツ帝国との関係を改善した。

ウラジーミル 1 世の改宗と結婚はヴァイキング時代が終わり奴隷貿易が衰退した結果でもある。ちなみに、ヨーロッパでキリスト教の国教化がもっとも遅れた国はスウェーデンである。1008 年、スウェーデン王オーロフがキリスト教＝カトリックに改宗する。他方、バルト海沿岸が異教の地として残る。

ウラジーミル 1 世の死後、キエフ大公国はヤロスラフ 1 世（在位 1019～1054 年）の代に版図をカルパティア山脈以東からドン川以西に広げ、また現在のモスクワ以北およびサンクトペテルブルク以北にまで広げる。他方、キエフ大公国の西方、およびバルト海沿岸にリトアニア大公国とポーランド公国が誕生する。オットー 1 世がオーデル川以東に関心を持ち、ザクセン伯ヴィヒマンの侵略にさらされたポーランド公国の族長メシュコはボヘミア公国（現在のチェコ共和国）の公女ドゥブラフカを娶り、カトリックに改宗してポーランド王に即位する。そして次のボレスワフ 1 世（在位 992～1025 年）がドイツ皇帝オットー 3 世と同盟を結び、ポーランド王国を強国にする。またアールバード朝ハンガリー王イシュトヴァーン 1 世（在位 997～1038 年）もオットー 3 世と同盟を結び、ハンガリー王国を強国にする。

しかし重要なことは、オットー 3 世がポーランド王とハンガリー王の戴冠を認め、大司教座の設置も認めたことである。すなわち、ポーランドとハンガリーの国教会がカトリック教会になったことである。国教会のちがいが東ヨーロッパをポーランドやハンガリー等とロシアやブルガリア、セルビア等に二分した。

#### 4. 4 唐朝末期と唐の亜周辺

「広義の中世」の出現期（4世紀後半～8世紀後半）は帝国の下で国教と国教会、貨幣経済が誕生し、発達した時代であった。帝国の官僚機構が軍政と民政に分離し、民政が中央集権化した。そして皇帝が財貨を発行し、国教会が裁判と徴税を担う。国教会は金融も営んだ。他方、貨幣経済が土地や奴隷の売買を促進し、荘園が巨大化する。

だが、ひとつの帝国がユーラシア大陸全域を覆う場面はなかったし、ひとつの信仰がユーラシア大陸全域を覆う場面もなかった。ユーラシア大陸西部では、8世紀後半にアッバース朝イスラーム帝国が金銀複本位制を「発明」し、その後銀貨＝銀が世界通貨になる。そして帝国のスキームが変貌し、イスラーム帝国の中央集権体制が崩れる。ビザンツ帝国は中央集権体制を維持したが、版図を大きく縮小した。他方、ユーラシア大陸東部では銅貨が流通し、唐の中央集権体制が崩れる。

安史の乱（755～763年）後、長安を中心とする関中の一部、洛陽を中心とする中原の一部を除く唐の版図がすべて藩鎮になる。すなわち、唐の藩鎮数が50前後になり、兵員の大多数が傭兵になる。そして歳出の約8割が軍事費になる。

安史の乱以前の藩鎮制は、ビザンツ帝国の軍管区制＝テマ制に似ている。しかし安史の乱後、唐は軍役と徴税を各藩鎮に委ねる。各藩鎮は税の3分の2を傭兵の報奨等で使い、残り3分の1を長安に送った。だが税額は容易に改竄できる。各藩鎮が真面目に税の3分の1を長安に送ったとは考えにくい。とりわけ河北の三藩鎮は、安祿山と史思明を「二聖」と呼んで讃え、独自の税を徴税して傭兵の報奨に当てたりした。しかし朝廷は無力であった。

780年、財政難に陥った唐は両税法を実施する。両税は安史の乱以前に実施した戸税を改めた税であるが、課税対象が自由農民だけでなく荘園で働く小作農や奴隷＝奴婢にも及んだ。しかも納税が物納から金納になる。そのため、銅貨が不足し、唐は深刻なデフレに陥る（他方、農産物の種類に変化が生じた。両税法実施前は、華南や華中の主要農産物は米で華北の主要農産物は粟である。しかし両税法実施後、華北の主要農産物が小麦になる。作付けは粟より悪くなるが、当時の小麦は商品作物である）。

また、唐は750年に塩や鉄の専売制を実施したが、安史の乱後、塩の値段＝塩税を10倍に引き上げる。デフレ下で塩の値段が高騰し、塩の密売がはじまる。そして黄巢の乱（874年）が勃発する。907年、黄巢の部下であった朱全忠が帝位を篡奪して後梁を開国する。唐は滅亡し、その後約半世紀、五代十国時代が続く（コラム22）。

（すでに述べたように、同時代のアモリア朝ビザンツ帝国も小作農や奴隷から徴税したが、デフレに陥る場面はなかった。理由は、金貨の質を落として金貨の発行量を増大し、さらに金貨や銀貨を補う手段として新たに銅貨を発行したからである。おそらく、アモリア朝ビザンツ帝国で物品貨幣が消滅した。両税法の下で唐も財貨を銅貨に一元し、絹と塩を事実上の補助貨幣にして貨幣経済を構築する。唐でも物品貨幣が消滅した可能性があるが、新たな財貨を発行して銅貨を数量補填する場面がない。貨幣を財貨に一元したアモリア朝ビザンツ帝国は財政と金融が一体化していたが、唐は財政と金融を分離していた、とも言える。唐では、塩の密売は偽札づくりと同じである。とはいえ、塩による納税を認めていない。筆者の認識では、ビザンツ帝国で物品貨幣が消滅したのは9～10世紀であるが、ユーラシア大陸西部全域で物品貨幣が消滅したのは12世紀後半頃である。同じ頃、日本のような例外を除けば、ユーラシア大陸東部でも物品貨幣が消滅した。とはいえ、8世紀後半から9世紀後半のビザンツ帝国と唐の比較研究はやるだけだけの価値がある。筆者が知る限り、同時代のビザンツ帝国と唐を比較研究した歴史家や社会学者はいない）

ところで、安史の乱が勃発する約10年前、鉄勒部族のウイグルが東突厥＝第二可汗国を滅ぼしモンゴル高原を支配する。その後ウイグルは唐と友好関係を結ぶ。唐は、ウイグルの援軍を得て安史の乱を鎮圧した（当時のウイグル人はモンゴル系鉄勒部族である。だが、一部の歴史家が、トルコ系部族であると論じている。むしろ現在のウイグル人にとって、過去のウイグル人がモンゴル系であるかトルコ系であるかはどうでもよいことである）。

安史の乱後、ウイグルと唐は戦火を交える場面もあったが、吐蕃という共通の敵が存在していた。790年から約30年、ウイグルと唐の連合軍が吐蕃軍と戦火を交える。約30年の戦乱で関中の地が荒廃し、他方、ウイグルはジュンガル盆地およびタリム盆地を占領してシルクロードを支配する。821年、唐と吐蕃は平和条約を結び和睦したが、ウイグルと吐蕃の戦闘が続く。840年、ようやくウイグルと吐蕃の和議が

成立し、約50年の戦争が終結する。

長年の戦争でウイグルも吐蕃も疲弊した。その後寒波がモンゴル高原を襲う。多数の家畜を失ったウイグル部族は現在の甘粛省とジュンガル盆地、およびタリム盆地に移動し、甘州ウイグル王国と西ウイグル王国＝天山ウイグル王国を建国する（やがて西夏が甘州ウイグル王国を滅ぼし、モンゴル帝国が西ウイグル王国を併合する）。他方、吐蕃では843年にラン・ダルマ王が廃仏を断行する。だがラン・ダルマ王は暗殺された。その後吐蕃は南北に分裂する。そして唐が現在の青海省と甘粛省を奪還する（コラム23）。

9世紀後半、モンゴル高原もチベット高原も疲弊した。そして10世紀前半、唐の消滅と同期するように「ウイグル帝国」も「吐蕃帝国」も消滅する。南方も同様である。唐と吐蕃が平和条約を結んだ後、南詔国が現在の四川省に侵攻し、成都を一時占領する。その後現在のミャンマーやタイ、ラオス、カンボジアに侵攻し、ベトナムを支配して領土を拡大した。だが902年にクーデターが勃発して滅ぶ。その後短命王朝が続き、937年に段思平が大理国を開国する。

## コラム22： 三武一宗の法難

歴史家や仏教関係者（とりわけ中国の歴史家や仏教関係者）たちは、北魏の太武帝と北周の武帝、唐の武宗と後周の世宗が実施した廃仏を「三武一宗の法難」と呼んでいる。だが廃仏をたんなる仏教弾圧、あるいは信仰弾圧と見ることはできない。背後に国教と国教会、貨幣経済の問題がある。

北魏の太武帝が廃仏を断行したのは長江以北（華北と華中）を統一した後である。中華思想に固執する宰相崔浩が唆したためであると言われていたが、当時の北魏は貨幣経済が未発達であった。他方、南朝の宋で貨幣経済が進展していた。すでに述べたように、貨幣経済の誕生と進展に国教と国教会が不可欠である。崔浩はサーサーン朝ペルシャのキルデールのような役割を担っていたように思う。崔浩は儒教あるいは道教の国教化を目指し、北朝と南朝の統一を目指していた。

北周の武帝は分裂した華北を再統一した。周礼の下で政教一致を促進し、儒教を国教化して貨幣経済の進展を目指したように思う。北周の武帝は574年に廃仏を断行した。だが578年に死去する。その後帝位を篡奪した隋の文帝が仏教を国教化した。

唐の武宗が廃仏を断行したのは貨幣経済が進展した後で、唐の中央集権体制が崩壊してデフレが蔓延した時期である。武宗にとって、廃仏は金融改革であり、財政改革であった。当時の寺院は荘園を保有し、金融も営んでいた。武宗の廃仏目的は寺院が隠匿する銅や銅貨を外に市場に流してデフレを解消し、寺院が保有する荘園を獲得して財政を健全化することにあったと思う。しかし武宗の在位期間はわずか6年で、次の宣宗は仏教を保護する。

後周の世宗は五代十国時代を終わらせ中国の再統一を目指していた。世宗は廃仏を断行し、銅の私有を禁じている。世宗の廃仏目的は純粋に銅と銅貨の獲得であったと思う。世宗は獲得した銅貨で軍を強化した。世宗は中国を再統一する前に死去するが、北宋の太祖と太宗が彼の意思を継ぐ。北宋期に仏教が大きく変貌し、儒教や道教も変貌する。

歴史家や仏教関係者の多くが、「三武一宗の法難」を上と同様に論じている。だが、筆者の知る限り、国教と国教会、および貨幣経済の同時代性を論じる歴史家や仏教関係者がいない。また、寺院への寄進が事実上の「銀行預金」であった可能性を論じる歴史家や仏教関係者もいない。しかし貨幣の神秘性は国教に由来する。そして「広義の中世」の出現期にユーラシア大陸東西で金融を営んだのは国教化した仏教寺院やキリスト教会である。

（仏教寺院やキリスト教会が金融を営んでいたと論じる歴史家や宗教関係者は少ないが、稀にいる。しかし彼らはそのような国教会の有り様を非難する。だが、貨幣経済にとって国教会は不可欠であり、銀行が不在であった時代に金融を営むのは国教会の役割である。彼らが非難しなければならないのは、仏教寺院やキリスト教会が金融を営んだことではなく、仏教やキリスト教が「国教」化したことである）

## コラム 23 : 長慶会盟

唐と吐蕃の平和条約＝長慶会盟を記した石碑＝唐蕃会盟碑が今もチベット自治区のラサ市に残っている。内容は、国境を策定した不可侵条約である。ところが、現在の中国政府は長慶会盟を唐と吐蕃の合併を意味するものであると解釈している。そして1948～1951年に行ったチベット侵攻を正当化している。当然、チベット亡命政府は反発しているが、問題はその先にある。

仮に長慶会盟が唐と吐蕃の合併を意味するもので、それが今の中国がチベット自治区（および青海省と甘粛省、四川省と雲南省の一部）を支配する根拠であるとすれば、中国が新疆ウイグル自治区（および内モンゴル自治区等）を支配する上でも同様な根拠が必要になる。しかし中国は別の理由で新疆ウイグル自治区を支配している。すなわち、中国政府はダブルスタンダードの下でチベットの高度な自治権要求とウイグルの独立運動を弾圧している。

ダブルスタンダードは国際社会の慣例に反するが、とはいえ歴史と領土は無縁である。「歴史的固有の領土」などという「領土」は存在しない。そして、国家の主権は他国が承認するか否かによる。したがって、弱小国の独立性を支えることは、国連の大きな仕事のひとつである。しかし、過去も現在も、国連がその役割を十分はたしているとは思えない。

（一部の評論家等が、権力闘争や過剰投資、地域格差や貧富差の拡大、環境汚染等を根拠にして中国＝中華人民共和国が分裂する可能性を論じている。だが、今後10～20年以内に中国が分裂する場面はおそらくない。したがって、チベットやウイグルの人々が固有の歴史や民族のちがいを根拠にして運動を続ける限り、不幸が続く。チベットやウイグルの人々は、他民族国家中国全体の刷新を考えるべきだ。もっとも要求すべきことは、おそらく信仰の自由である。むろん信仰を持つ人々が「信仰の自由」を語るのは容易でない。筆者のように、信仰を持たない人間のほうが「信仰の自由」を語りやすい。とはいえ、チベットやウイグルの人々にはその困難さを克服してほしいと願う）

ところで、唐の武宗は廃仏を断行したが、同じ頃、吐蕃のラン・ダルマ王も廃仏を断行している。これを偶然の一致と見ることはできない。廃仏はどちらも失敗するが、唐にとっても吐蕃にとっても仏教は「お荷物」になっていた。唐でも吐蕃でも、貨幣経済が進展し、社会は新たな統治機構を必要としていた。しかし廃仏を断行した後の唐も吐蕃も新たな統治機構を発明できなかった。ユーラシア大陸西部の状況も同じである。

ユーラシア大陸西部でも東部でも、中世帝国は新たな統治機構を発明できなかった。だが商品経済が生成する。そして経済空間に位相構造を形成する。そこから「広義の近代」が始まるが、ユーラシア大陸西部で最初に経済空間が変貌した国家はコムネノス朝ビザンツ帝国である。ユーラシア大陸東部で最初に経済空間が変貌した国家は南宋である。皇帝が「立法者」として君臨し、国教を凌駕する国法の発明が大きい。ビザンツ帝国はマケドニア朝期に、中国は北宋期に国法を発明した。

（国法の下で商品経済が生成して発達したとも言えるが、平たく言えば、法は「命令」である。問題は誰が「命令」を発信するかである。国教が最高法規であった時代の命令発信者は国教会である。したがってビザンツ帝国と隋唐帝国、そしていくつかの例外を除けば、西ヨーロッパやアジアの国王（すなわち「亜周辺」の国王）は執行権＝行政権を有していたにすぎない。「広義の近代」の出現期に彼らも「立法者」として君臨するようになるが、最初に皇帝が「立法者」として君臨した国家は高度化した中世帝国、すなわちコムネノス朝ビザンツ帝国と南宋である）